

## Ⅶ 箱根仙石原湿原植生の維持と存続の可能性

箱根仙石原湿原植生の維持・存続について長期的視野に立ってみると、かつての広大な箱根火山カルデラ内に広がった湿原が、水位の低下に伴い減少している歴史的経過から見ても、また日本各地の湿原の推移を見ても長期的には次第に乾生化の傾向をたどっている。

このような湿原の宿命的な乾生化、減少化は、自然状態では一般に徐々に長いタイムスケールで進行するにすぎない。しかし、周辺の自然開発を主とした上流水源域の植生の変化や乾生化は、必然的に湿原の水分収支に直接、間接に影響をもたらす危険性が強い。

現在の仙石原湿原は、その南西側約3kmの距離に位置している芦ノ湖よりも海拔高にして約60m低い地域にあるが、湯沢川で分断され、芦ノ湖の浸透水その他による水分供給は考えにくい。年間降水量約3000mmの豊かな降水と、山塊としてブナ林（ヤマボウシ・ブナ群集）に山頂部を被われている台ヶ岳（1044m）が、湿原の主な給水源と判定される。

箱根仙石原湿原植生の保護にとってもっとも大きな影響を与えている人為的干渉は、国指定天然記念物に直接している県道湯河原箱根仙石原線が建設されていることである。

この舗装された巾6.5mの県道建設に際しては、当時台ヶ岳からの仙石原湿原への滲透水などによる水供給を無視できず、道路の下に土管（一辺約0.6mのボックス）を埋設している。

結果的には、この土管を通して湿原に供給される水流が、たえず無機養分の豊富な土砂を天然記念物指定地域内の湿原内に流入・堆積させる結果となった。本来降水を主とし、新しい土砂の堆積などによる富養化に対応が困難な湿原植生は、結果的には、水分だけで十分補給すれば良いと考えた土管による一箇所からのかなり強い流速のある管理によって、かえってより富養性の草原化を促す結果となっている。しかも、流入した土砂が堆積したところは、ススキ群落の各下位群落などが生育域を広げる状態にある。

国指定天然記念物を中核とした箱根仙石原湿原の多彩な植物群落と、その多様な立地条件を将来に向かって、維持するためには、これからも、たえず様々な新しい人為的干渉をもたらす公私の計画や作業に対してきびしい対応をせまられることであろう。しかし、数万年あるいはさらに長い時間的経過の中で湿原植生の自然的な変化、遷移、衰退は別としても、現在の湿原植生とその環境は、湿原植生は、もとよりその周辺部の保護・保全、慎重な地域計画の枠内で十分存続させることが可能と考えられる。

その前提として、多湿あるいは過湿、貧養、酸性の一面的で極端な、特殊な立地条件が全体として大きく変動しない均衡状態が保たれているような湿原環境の継続が重要である。

仙石原湿原植生の様々な生物群集は、環境の変化にきわめて敏感な弱い自然である。たとえ善意で行う人間の干渉であっても、天然記念物や保護地内の湿原植生、その立地はもとより、周辺

部とくに台ヶ岳を含めた湿原の水分供給源となる上部の植生や自然環境の保全がきわめて重要である。

この様な十分な湿原環境の保全，周辺部への人為的干渉の排除によって箱根仙石原湿原植生は，将来にむかって十分に存続させることが可能と判定される。

(宮脇)